

# 芥川龍之介「菫車」解説

——ギリシャ神話「復讐の女神」エリニユスに行き着く二つのコード——

宮坂 覺

## はじめに —— 迷宮としての「菫車」の世界 ——

「菫車」(一九二七(昭和二年)一月『文芸春秋』(遺稿)(ただし「一」のみ、六月『大調和』は、「ソドムの夜」と起稿され、「東京の夜」、「夜」と改題され、「菫車」の題で、遺稿として発表された作品である。さらに言えば、最終章「飛行機」の脱稿日(四月七日)は、一回目の心中未遂の日に重なる。その意味において、もう一つの絶筆ともいえ、芥川文学の集大成の一つでもある。

「菫車」は、発表時から〈彼の作中第二〉(佐藤春夫)、「生涯の最大傑作」(堀辰雄)、「すべての作品に比べて断然いい」(川端康成)と評価は高い。あるいは、一九五四年二月発行の『芥川龍之介読本』(『文芸』臨時増刊号、河出書房)の作家、批評家、研究者などへのアンケート「二 芥川龍之介の作品で何が一番好きですか」で、回答者七七名に対して「菫車」の登場回数は一三回でトップである(因みに、次点以下は、「河童」(八)、「秋」(地

獄変」(六)、「鼻」(五)、「お富の貞操」(四)、「羅生門」(芋粥)「玄鶴山房」(杜子春」(三)、「蜘蛛の糸」(蜜柑)「西方の人」(蜃気楼)「藪の中」(秋山図)「南京の基督」(偷盗)「手巾」(二)、ほかに「舞踏会」(枯野抄)など一六作品が挙がっている。このアンケートは、時代性もあって大変興味深い。

「菫車」は、芥川テキストの中でも芸術的完成度において極北的位置を占める。完成度が高いばかりでなく、日本のモダニズム文学の先蹤的テキスト(作品)でもあった。「菫車」は、迷宮を思わせる芸術的装置が鏤められ、超緻密な暗号が張り巡らされている。それらを解くことがこのテキストの最大の魅力でもある。緻密な構築の中に不安や崩壊、終末観など人間存在の不条理を描きこまれるゆえにモダニズム文学の祖形として、のちの作家に受け継がれることとなる。モダニズム文学の先蹤としての文学史的意味がそこにある。

例えば、近年では、村上春樹は、

僕はこの『菫車』という作品を十五歳のときに読んだ。か

れこれ四十年前のことである。(中略) いくつかの情景をいまだに鮮やかに記憶していたことに、自分でもずいぶん驚いてしまった。それも、ただ平面的な情景というには留まらず、そこに射している光の具合や、聞こえてくる小さな音までをも含んで、ありありと立体的に記憶の中に残っていたのだ。(村上春樹「芥川龍之介——ある知的エリートの滅び」<sup>2</sup>)と、「菌車」に言及している。

「菌車」には、複雑に様々なコードが張り巡らされているが、どのコードをとっても完成度が高いうえに、その張り巡らされたコードそれぞれが作品全体に有機的に機能している。が、完成の精度が高いほど、「菌車」一編のテーマは解体されてゆく。モダニズム文学の先蹤といわれる一端もそこにある。

張り巡らされたコードを解きほぐくと、西洋古典と東洋古典(日本、中国)、中世と近代(新時代、現代)、西洋(一神教的世界)と東洋(多神教的世界)、ヘブラニズムとヘレニズムなどが読み取れる。が、コード一つで読み切れないところに、「菌車」の最大の難解さと魅力があることは言うまでもない。が、一つのコードでテキストを読み切れないが、それらが醸し出す「ぼんやりした」統一体は何かに向かっていようである。おそらくそれは、「終末」ではないか。

多層的コードの中でも、目立って展開される一つに西洋における多神教的世界と一神教的世界、すなわちヘレニズムとヘブラニズム、より具体的に表現するならば、ギリシャ神話の世界とキリスト教的世界が読み取れる。そこで本論では、ギリシャ神話の

コードに寄り添って解説をし、「菌車」の世界の一端を覗いてみたい。

すでに、「菌車」に言及した拙論考等は、①芥川作品論辞典「菌車」(別冊国文学『芥川龍之介必携』、一九七九・二)、②「芥川龍之介の罪意識」——『白』『菌車』を中心として——(一九七九・四)、③「菌車」——「ソドムの夜」の彷徨——(一九八一・五)、④「作品別芥川龍之介研究史『菌車』」(一九八五・五)、⑤「芥川龍之介小論——「狂人の娘」「菌車」「或阿呆の一生」(復讐の神)——「菌車」と父の「性」への忌避をめぐって——(一九八五・一二)、⑥「芥川龍之介「菌車」ノート——嵌めこまれたさまざまな風景——(一九九七・八)、⑦「芥川龍之介「菌車」——ドストエフスキー「罪と罰」との関わりをめぐって——(二〇〇九・三)がある。④を除いて、五本ある。本論に入る前にそれらの論考を確認しておきたい。

①は作品論辞典の項目執筆であるが、原題が「ソドムの夜」であったことに初めて言及した(最初の指摘は、一九七五・一二の口頭発表)。<sup>1</sup>②は、「白」と「菌車」にみられる「罪意識」について論究した。未定稿「ある鞭」「唾」に言及し、「白」の罪意識が「菌車」にどのように継承されたかを論究した。さらに、「菌車」では、「罪意識」を踏み抜き(罰せられた自己)を発見しているとした。さらに、原題「ソドムの夜」から定稿「菌車」にいたる改題の経緯を明かにした。③は原題「ソドムの夜」、最終章「飛行機」の脱稿日と最初の心中未遂の日が重なることを再確認したうえで、さらに描き分けられている色について言及した。特に

「緑」「黄色」に注目して黄色をソドムによって惹起される「硫黄」に行き着くことなどを指摘した。④は先行の「歯車」論の鳥瞰整理の「研究史」である。⑤は、拙稿③に触れた、加藤明氏の「歯車」論―ギリシャ神話の暗合をもとに―（一九八四・一、『日本文学』）に刺激された論考である。③で「復讐の神」を「親和力のために犯した（狂人の娘）との過ちから派生したもの」と捉えた。対し、加藤氏は、ギリシャ神話のエリニュスを指摘し、「復讐の神」に追跡される元凶である（狂人の娘）を「芥川における母の複合表象＝母親コンプレックス」として捉えた（加藤論は、のちの筆者の「歯車」論に大きな影響を与えた論考であった。今でも敬意を持っている）。が、「復讐の神」から、「狂人の娘」＝秀しげ子の翳を払拭しては、「歯車」一編の正確な読解は、恐らく無理であろうとしたうえで、さらに実父の〈性〉の問題を視野に入れたつ、新たに「復讐の女神」エリニュスに迫った。そして「翼」、あるいは「白色」の意味を指摘した。⑥は、「歯車」一編を、「近代都市小説」、「近代都市彷徨小説」あるいは、「ホテル小説」と位置づけ、一九二〇年代のモダンな風景、語彙などを検証した。その中で色彩を、特に「白」「黒」に焦点を当て、⑤を進展した。すなわち、「Ⅲ 翼」のある風景」において、

「歯車」に散在する「翼」について、それは、「復讐の女神エリニュスたち」とし、エリニュスたちは、髪は蛇という異形な出で立ちで、母殺しの男をどこまでも追跡し、男が狂気に攫われるまでその復讐を止めない。復讐が貫徹すると、真つ黒な服装が純白に変わると言う（黒から白への変化は、

「歯車」の後半において、巧みに書き込まれていることも看過すべきではない。後半に行くにしたがつて、黒と白が印象的に出てくるのは、〈僕〉への復讐が貫徹することが近いことを予感させる。彼女たちは、男たちに死を与えることはしない。どこまでも追跡を止めない。その彼女たちの最大の武器とも言えるものが「翼」なのである。「歯車」において、「翼」は、〈復讐の女神たち〉の強力なイメージとして書き込まれていると思われる。

と、論じた。⑦は、キリスト教世界にも触れつつ「歯車」と「罪と罰」の関りを論じた。

「歯車」と「罪と罰」のキーワード「極度の恐怖心」（「創作ノート」）の世界造形に芥川は、ギリシャ神話の〈復讐の女神〉を作品世界に放った。すでに論じたこともあるが、〈復讐の女神〉の最大の武器のひとつは翼である。〈翼〉のイメージが、通奏低音のように作品世界を覆っていることは看過できない。

と、触れたに留まっている。

以上過去の「歯車」に関わる拙論の整理をしたが、本論のテーマについては、八〇年代の①から問題にしながらも、絞って論究するに至っていない。本論では、過去の拙論を継承しながら、〈色彩〉（緑、黄、赤、白、黒）と〈翼〉（エエア・シツプ、飛行機）の二つのコードを検証しつつ〈復讐の女神〉エリニュスに絞って（サンダルを片つぽだけはいった希臘神話の中の王子）アイソン、攻めに苦しむタンタルス、人工の翼のイカロス、エリ

ニユスのターゲットとなったオルステロスなどギリシア神話の人物たちも登場するが、基軸は〈復讐の女神〉エリニユスと考える）、「蘭車」に対する新稿を企図してみたい。

《復讐の女神》エリニユスを確認すれば、例えば、三枝和子は、彼女たちの姿形は、通常、翼を持ち、頭髮は一本一本が蛇で手に炬火をかかげて罪人を追い廻し、ついには狂気に到らしめるといわれている。ギリシア悲劇でこのエリーニユスが登場すると、原題でも観客に異様な恐怖感を喚びます。

（『ギリシア神話の悪女たち』<sup>(5)</sup>）  
と、彼女たちのおどろおどろしさを描いている。

また、『芥川龍之介文庫目録』（一九七七・二、近代日本文学館）のギリシア神話に関する蔵書を確認すれば、以下の五点ほどみられる。

Euripides. Electra. tr. into English rhyming verse with explanatory notes by Gilbert Murray. London. Allne. 1914.

Euripides. Iphigenia in Tauris. tr. into English rhyming verse with explanatory note by Gilbert Murray. London. Allne. 1913.

Euripides. Medea. tr. into English rhyming verse with explanatory notes by Gilbert Murray. London. Allne. 1913.

Ovidius. The metamorphoses. tr. into English prose by Henry T. Riley. London. Bell. 1915.

Homer. Odyssey, done into English prose by S.H. Butcher and A. Lang. London. Macmillan. 1919.

これらの蔵書には、特記するような書き込みは見られない。これらの書物を読んだのは、一高時代かと考えられる。この頃の書簡に、ホフマンスタールの「エレクトラ」を観劇し、「エレクトラをみに行った。―（中略）―兎も角エレクトラはよかつたエレクトラエレクトラと思ひながら其晩電車に揺られて新宿へかえつた（一九一三（大正二）年一〇月一七日付 井川恭宛）と感動を綴っている。

なお、本論文の性格上、テキスト本文（○番号）の引用の多用や、過去の拙論に触れることを諒とされたい。

## 一 色彩の世界が意味するもの（一）

――「緑いろ」・「黄いろ」・「赤いろ」――

テキスト「蘭車」は、

### 一 レエン・コウト

僕は或知り人の結婚披露式につらなる為に鞆を一つ下げたまま、東海道の或停車場へその奥の避暑地から自動車を飛ばした。自動車の走る道の両がはは大抵松ばかり茂つてゐた。

と、開かれる。さらに、「待合室のベンチにはレエン・コウトを着た男が一人ぼんやり外を眺めてゐた。僕は今聞いたばかりの幽霊の話の思ひ出した。」と、「レエン・コウトを着た男」が描かれる。

対し、最終章「六 飛行機」は、

僕は東海道線の或停車場からその奥の或避暑地へ自動車を飛ばした。運転手はなぜかこの寒さに古いレエン・コウトを

ひつかけてゐた。僕はこの暗合を無気味に思ひ、努めて彼を見ないやうに窓の外へ目をやることにした。すると低い松の生えた向うに、——恐らくは古い街道に葬式が一行通るのを見つけた。

と、開かれる。「東海道の或停車場へその奥の避暑地から自動車飛ばした」(二)は、「東海道線の或停車場からその奥の或避暑地へ自動車を飛ばした」(六)となる。移動のベクトルは逆であるが、明らかに「反復の装置」を稼働させ、往還のシステム「出発と帰還」を提示する。が、このテキストで見逃してはならないのは、身体と心体が裂けて、身体は帰還できるが、心体は帰還ではなく闇の中宙ぶりの世界に放たれるということである。一見、二項対立的にある世界は、崩壊の危機にあり、中有に浮いているのである。往還の世界の二層性の裂け目は意図的であることは明白である。「反復の装置」は、「蜘蛛の糸」「杜子春」などの芥川の物語の構築にしばしば採用されて、物語の神話化に極めてうまく機能している。「歯車」の場合は、それらの神話化とは異なり、装置は、確かに一見常套の神話化、物語化であるが、物語内容は冒頭「一 レン・コウト」と最終章「六 飛行機」では物語世界は乖離し、解体していることが大きな特徴といえよう。蓮實重彦は、ここに、「自動車／列車」は、「避暑地／首都」の対立関係に重なることを指摘している。

「歯車」は、  
かう云ふ氣もちの中に生きてゐるのは何とも言はれない苦痛である。誰か僕の眠つてゐるうちにそつと絞め殺してくれる

ものはないか？

と、閉じられ、作品世界は、開かれたまま、宙ぶりのままピン止めされた。そこには、芥川作品の、特に前期にみられる作品世界を封じ込める(神話化)「閉じ方」の妙味はない。晩期の芥川作品の特徴的なつくりである。

さらに、「結婚披露式」／「葬式」の列(葬列)に、「茂つてゐた」松／「低い松」に、「待合室のベンチにはレン・コウトを着た男」／「なぜかこの寒さに古いレン・コウトをひつかけてゐた」運転手に代わっている(レン・コウト)は「一」で六回も登場させ刷り込みを行っている。さらに、「道の両がはは大抵松ばかり茂つてゐた」が、「低い松の生えた向うに、——恐らくは古い街道」となる。両側が松に囲まれている「道」／低い松越しに続く「古い街道」となり、〈松〉は平安を想起させる「包むもの」から境界線、或は壁と変わっている。これらの入れ替わりを看過するわけにはいかない。

このように「歯車」が特異な開き方、閉じ方をしているのは、周知のことである。そこには明らかに、物語世界への導入と終末が周到に用意されていたからである。すなわち、隠れた幾何学的な意図された物語構築は、現代小説を思わせる帰還なき(神話)世界へ構を支えている。その言語パーツの置き方は無駄がなく、ジグソーパズル、モザイクの様相をなしている。それを解説するには、さまざまな方法があるだろう。それこそが、「歯車」の底知れぬ魅力でもあり、結果的に、不条理な人間の有様を描くことになっている。そこから一つのテーマを導き出すことは困難で、

複合した多層の世界が展開し、モダニズム文学の先蹤としての立ち位置が読み取れるのである。

本論では、複合された世界を、一つのコード、一つの層を解析すること、で、「歯車」が持つ戦慄の強度の不安の一端を読み解き、〈復讐の女神〉エリニュスに行きつく過程を検証する。「歯車」に、色彩語、それを想起させる語彙が多出し、それが何らかの意味を持つているだろうことは一読して看取できる。

色彩に触れる（あるいは想起させる）語を抽出すると容易に意図的であることが解る。夙に、加賀乙彦は、

黄色のものはすべて、松林も本もタクシイも、不吉の徴とされ、反対に緑色のものは吉徴とされる。白いもの―バスタブ、コック帽、レグホン種の鶏―は不安を呼び起こし、赤は不気味さの、黒は悪魔の力の象徴とされる。

#### （「歯車」の診断<sup>⑦</sup>）

とし、さらに「ところでこの色に関する異常な敏感な反応は、どうもあまりにも首尾一貫しすぎていてどうも人工的な感じがする。」と鋭い指摘をした。まさに、「人工的」な感を与えることも芥川の意図にあった。

では、人工的に現出する「色」を、具体的に検証してみる。

「色」に触れる色彩に関わる語の登場数を掲げてみると、

「緑」21（緑いろ6、「松」15（うち松林9、松山1））、

「黄」10（黄いろい6、硫黄2、黄いろに・黄はんだ各1）、

「赤」28（赤光3、まつ赤・赤い光・赤いワンピース各1、「火」

22（うち火事6、放火・火鉢各2、火災保険、家の焼ける、

家が焼けない各1）、

「黒と白」5（黒と白2、Black and White 2、ブラック・アンド・ホワイト1）

「白」13（白い8、白地・白張りの提灯・白じらと各1）

「黒」4（黒ませて1、黒子1、黒い犬1、黒犬1）

である。色彩語に関わる語の背後には、物語があることは部分的には指摘されている。では、どんな〈物語〉が読み取れるのだろうか、以下、考察を加えたい。

まず、「緑いろ」と「黄いろ」を、考察する。なぜなら、この二色は、対語のように互いに意識して機能している（②参照）からである。

「green 緑色」は、「母なる大地、生命、永遠、平和、自由」などを表す色とされている。「緑いろ」に関わる語を、テキストに表れる箇所を具体的に指摘する。

① するとロツビイへ出る隅に緑いろの笠をかけた、背の高いスタン드의電燈が一つ硝子戸に鮮かに映つてゐた。それは何か僕の心に平和な感じを与えるものだった。

（「レエン・コウト」）

② たまに通つたのは必ず黄いろい車だった。（この黄いろいタクシイはなぜか僕に交通事故の面倒をかけるのを常としてゐた。）そのうちに僕は縁起の好い緑いろの車を見つけ、兎に角青山の墓地に近い精神病院へ出かけることにした。―（中略）― 緑いろのタクシイはやつと神宮前へ走りかかった。―（中略）― が、このホテルの玄関へおけると、レエン・コオ

トを着た男が一人何か給仕と喧嘩をしてゐた。給仕と？——いや、それは給仕ではない、緑いろの服を着た自動車掛りだつた。

## (二 復讐)

③それから「宗教」と云ふ札を掲げた書棚の前に足を休め、緑いろの表紙をした一冊の本へ目を通した。この本は目次の第何章かに「恐しい四つの敵、——疑惑、恐怖、驕慢、官能的欲望」と云ふ言葉を並べてゐた。僕はかう云ふ言葉を見るが早いか、一層反抗的精神の起るのを感じた。——(中略)——僕は屈辱を感じながら、ひとり往來を歩いてゐるうちにふと、遠い松林の中にある僕の家を思ひ出した。それは或郊外にある僕の養父母の家ではない、唯僕を中心にした家族の為に借りた家だつた。——(中略)——彼女の着てゐるのは遠目に見ても緑いろのドレツスに違ひなかつた。僕は何か救はれたのを感じ、ちつと夜のあけるのを待つことにした。(三 夜)

「緑」色が、「母なる大地、生命、永遠、平和、自由」をイメージすることを述べたが、「菌車」には、「緑いろ」が六回現れる。容易に理解できるように、「緑いろ」は、(縁起の好い)「何か救はれた」感覚、(平和)を齎すその「緑いろ」も、早くも「二復讐」で、「黄いろ」の侵略を受け始める(②)。③においても、平安を齎すと予期した「緑いろ」の表紙をした「宗教の書物も、動揺を齎す。そして、彼は「松林」を想起する(③)。すでに言及してきたが、「松林」は、新婚時代から芥川龍之介の平和な家庭イメージに關わる。そして、「松林」の中にある僕の家「僕を中心にした家族の為に借りた家」のイメージは、「五 赤光」では

「黄ばんだ松林」と変貌する。

少し、順序が逆になつてしまつたが、「緑いろ」は、常緑樹「松」を容易に想起させる。「松」のイメージは、一五回執拗に書き込まれている。松は、冒頭で「両がはは大抵松ばかり茂つてゐた」と書き込まれ、最終章「六 飛行機」では一五回中七回現れている。その冒頭でも、「低い松の生えた向う——恐らくは古い街道に葬式が一行通るのを見つけた」と書き込まれる。テキスト冒頭では、「東海道の或停車場へその奥の避暑地から自動車を飛ばした」が、(僕)は茂つた松並木の間の道を駈に向う。が、最終章では、逆に「東海道線の或停車場からその奥の或避暑地へ自動車を飛ばした」が、茂つた松並木ではなく、古い街道を望める「低い松」が生える道に変わつてゐる。生命力に満ちた茂つた松は、風景から視野を遮らない程度の松に変貌していることが読み取れよう。さらに、すでに述べたように「平和の家庭」の「緑いろ」のイメージは、「黄ばんで」しまうのである。命の減退の予兆を看取してもよい。

問題の「yellow 黄色」は、「死と崩壊、鍊金術では硫黄、無気力、衰退、ベスト」などを表す色ともされている。<sup>(8)</sup>

「黄いろ」の源光は、原題「ソドムの夜」の「ソドム」から来ているという当初からの考えは、今も変わらない。<sup>(3)</sup>ソドムは、

主は硫黄と火とを主の所すなわち天からソドムとゴモラの上に降らせて、これらの町と、すべての低地と、その町々のすべての住民と、その地にはえてゐる物を、ことごとく滅ぼされた。

(「創世記」(一九章二四―二五節))

とある。ソドムはゴモラとともに、背徳のゆえに神が「硫黄と火」を降らせ焼き尽くした街である。ソドムのイメージには、「硫黄と火」は容易に想起する風景である。このテキストには、その一つの硫黄が唐突に二回書き込まれている。が、実は唐突ではなく、原題「ソドムの夜」「黄いろ」の重要さを鑑みれば、「火」「火事」とともに無視できない。

「黄いろ」のイメージは、以下一〇回登場する。

④ たまに通つたのは必ず黄いろい車だつた。(この黄いろいタクシイはなぜか僕に交通事故の面倒をかけるのを常としてゐた。)そのうちに僕は縁起の好い緑いろの車を見つけ、兎に角青山の墓地に近い精神病院へ出かけることにした。――(中略)――それから「希臘神話」と云ふ一冊の本へ目を通すことにした。黄いろい表紙をした「希臘神話」は子供の為に書かれたものらしくつた。けれども偶然僕を読んだ一行は忽ち僕を打ちのめした。――「一番偉いツォイスの神でも復讐の神にはかなひません。……」

(二 復讐)

⑤ 僕は丸善の二階の書棚にストリントベルグの「伝説」を見つけ、二三頁つづ目を通した。それは僕の経験と大差のないことを書いたものだつた。のみならず黄いろい表紙をしてゐた。僕は「伝説」を書棚へ戻し、今度は殆ど手当り次第に厚い本を一冊引きずり出した。――(中略)――僕はいつか憂鬱の中に反抗的精神の起るのを感じ、やぶれかぶれになつた賭博狂のやうにいろいろの本を開いて行つた。――(中略)――僕はふと口を噤み、鏡の中の彼の後ろ姿を見つめた。彼は丁度耳

の下に黄いろい膏薬を貼りつけてゐた。

(三 夜)

④の「黄いろい車」「黄色いタクシイ」で、「黄いろ」に付随するイメージを造形し、「黄いろい表紙」の「希臘神話」を引き出しギリシャ神話、ストリントベルグ「伝説」との非親和性を付与する(当然、③の「緑いろ」の表紙の「宗教」の本と対となる)。さらに⑤でこの範疇で「ストリントベルグの『伝説』」を引き出し、双子作品「地獄」を想起させる。それは、地獄の「業火」を想起させる(ストリントベルグは、最終章「六 飛行機」に「ストリントベルグのタイも黒と白だつた」と再度登場する)。

⑥「坐浴、――ベエトオウエンもやはり坐浴をしてゐた。……」

／坐浴に使ふ硫黄の匂ひは忽ち僕の鼻を襲ひ出した。しかし勿論往來にはどこにも硫黄は見えなかつた。僕はもう一度紙屑の薔薇の花を思ひ出しながら、努めてしつかりと歩いて行つた。

(四 まだ?)

⑦ 僕は彼の目の中に情熱を感じずにはゐられなかつた。のみならず彼の勧めた林檎はいつか黄ばんだ皮の上へ一角獣の姿を現してゐた。――(中略)――それから今度は手当り次第に一つの手紙の封を切り、黄いろい書簡箋に目を通した。この手紙を書いたのは僕の知らない青年だつた。しかし二三行も読まないうちに「あなたの『地獄変』は……」と云ふ言葉は僕を苛立たせずには置かなかつた。――(中略)――すると向うの窓硝子は斑々に外気に曇つた上に小さい風景を現してゐた。それは黄ばんだ松林の向うに海のある風景に違ひなかつた。

(五 赤光)

⑧ そこへ僕等を驚かしたのは烈しい飛行機の響きだつた。僕は思はず空を見上げ、松の梢に触れないばかりに舞ひ上つた飛行機を発見した。それは翼を黄いろに塗つた、珍らしい単葉の飛行機だつた。

#### 〔六 飛行機〕

宗教の「緑いろ」の期待を裏切られての表紙は、「希臘神話」(④)や「伝説」(⑤)の表紙へと変わった。前者は言うまでもなく「復讐の女神」を、後者は「地獄」を引き出している。さらに、「黄いろ」と「黄ばんだ」の間に「硫黄」を潜り込ませ(⑥)、業火や滅びを想到させる。そして、「黄ばんだ」林檎の皮は、「黄ばんだ松林」にかわる(⑦)。さらに、「黄いろに塗つた、珍らしい単葉の飛行機」を、「松の梢に触れないばかりに舞ひ上」がらせ、「緑いろ」の世界に戦慄を走らせ「黄いろ」の世界の制圧を予想させる。このように、「緑いろ」は前半で登場し、次第に終末に向かつて「黄いろ」に制圧されてゆく物語が浮上する。

では、神が背徳のソドムの街に降らせた「硫黄と火」で、残された「火」はどうか。「火」に関わる色は、言うまでもなく赤である。「red 赤色」は、「地獄、黒とともに悪魔、火炎の舌、復讐、復讐の女神の赤眼、一角獣の頭」などを表す色ともされている。

「緑いろ」と「黄いろ」の二項対立、「白(White)」と「黒(Black)」の二項対立も進度、深度は異なるが、グラデーション化が行われる。さらに、「赤」と「白と黒」の二項対立もグラデーション的に進展し、〈復讐の女神〉エリニユスの〈復讐〉の貫徹が近いことを予想させるのである。

## 二 色彩の世界が意味するもの(二)

——「赤」、そして「白色」(White)「黒色」(Black)——

「歯車」での「赤いろ」に関わるものの登場は、二六回と夥しい。そのうち「火」「火事」に関わるものは、二〇回に及ぶ。原題「ソドムの夜」を想起すれば当然過ぎるほど当然の風景である。<sup>10</sup>なぜなら、赤は、「地獄を表す」また「黒とともに悪魔の色」でもある。

⑨ 姉の夫は自殺する前に放火の嫌疑を蒙つてゐた。それも亦実際仕かたはなかつた。彼は家の焼ける前に家の価格に二倍する火災保険に加入してゐた。しかも偽証罪を犯した為に執行猶子中の体になつてゐた。けれども僕を不安にしたのは彼の自殺したことよりも僕の東京へ帰る度に必ず火の燃えるのを見たことだつた。僕は或は汽車の中から山を焼いてゐる火を見たり、或は又自動車の中から(その時は妻子とも一しよだつた)。常磐橋界隈の火事を見たりしてゐた。それは彼の家の焼けない前にもおのづから僕に火事のある予感を与へない訣には行かなかつた。／「今年は家が火事になるかも知れないぜ。」／「そんな縁起の悪いことを。……それでも火事になつたら大変ですね。保険は碌についてゐないし、……」

#### 〔二 復讐〕

「二 復讐」で、半数の一〇回登場し、「一」での「レエン・コウト」同様、「火」「火事」のイメージの刷り込みをしていることは看過してはならない。巧みな展開といえよう。特に、執筆の三

か月前の一月八日の各新聞は、放火嫌疑を受けた龍之介の義兄西川豊の自殺を報じている。『東京日日新聞』は、遺留物として、黒のカバンとオーバーコートが残されていたことを報じている。テキストでは、

僕の姉の夫はその日の午後、東京から余り離れてゐない或田舎に轢死してゐた。しかも季節に縁のないレエン・コウトをひっかけてゐた。

すなわち読者は、「レエン・コウト」で六回登場した「レエン・コウト」に、そのオーバーコートを想起するであろう。「真実と詩」の揺れの中に、見え隠れする作者の身体を看取する。その中で「火」や「火事」である（この時点では、原題「ソドムの夜」は、知られていなかった<sup>⑩</sup>）。さらに、次章「三夜」で、「復讐の女神」を登場させる。が、「復讐の女神」を予兆させるものは、すでに「レエン・コウト」の末尾に表れている。「時々戸の外に翼の音の聞えることもある。どこかに鳥でも飼つてあるのかも知れない。」の「翼」となつて表れているのである。⑩ 彼等は僕の顔を見ると、僕の前へ歩み寄り、口々に僕へ話しかけた。／「大火事」でしたわね。「僕もやつと逃げて来たの。」／僕はこの年をとつた女に何か見覚えのあるやうに感じた。のみならず彼女と話してゐることに或愉快な興奮を感じた。――（中略）――僕はひとりこの汽車に乗り、両側に白い布を垂らした寝台の間を歩いて行つた。すると或寝台の上にミイラに近い裸体の女が一人こちらを向いて横になつてゐた。それは又僕の復讐の神、――或狂人の娘に違ひなかつ

た。……

（三夜）

⑪ そのうちにふと出合つたのは高等学校以来の旧友だつた。この応用化学の大学教授は大きい中折れ袍を抱へ、片目だけまつ赤に血を流してゐた。

（四 まだ？）

⑫ しかも僕を照らしてゐるのは無気味にも赤い光だつた。僕は往来に立ちどまつた。けれども僕の影は前のやうに絶えず左右に動いてゐた。僕は怯々々々ふり返り、やつとこのパアの軒に吊つた色硝子のランタンを発見した。

（五 赤光）

⑬ この小みちの右側にはやはり高い松の中に二階のある木造の西洋家屋が一軒白じらと立つてゐる筈だつた。（僕の親友はこの家のことを「春のある家」と称してゐた。）が、この家の前へ通りかかると、そこにはコンクリートの土台の上にバス・タツプが一つあるだけだつた。火事――僕はすぐにかう考へ、そちらを見ないやうに歩いて行つた。

（六 飛行機）

前述したように、「二 復讐」で、「火」「火事」で刷り込みをしたが、さらに、「三夜」で、「大火事」から、「復讐の神」を提示する。《復讐の女神》エリニウスは、「赤眼」であつた。唐突な⑪「片目だけまつ赤に血を流してゐた」の表現は、《復讐の女神》エリニウスの「赤眼」に想到しよう。⑫の「赤光」は、確かに斎藤茂吉の歌集『赤光』にも相当するが、文脈からは「赤い光」を呼び込み、「不気味」な気持ちに追い込んでゐることは見逃せない。そして、赤い光は、「炎」「火事」に想到する。そして、最終章「六 飛行機」では、「高い松」「春の家」も不可解

な危機に瀕している。「そちらを見ないやうに歩いて行つた」のである。「それから鏡を見ない」(一)をも思い起させ、「努めて彼を見ない」(六)に想到すれば、そこまで迫っている危機に対する立ち位置、現実らしきものを直視できない在り様が知れよう。赤色(火)は、火事かソドムや地獄を思わせる火事(9)から次第に、「復讐の神」(10)ににじり寄ってゆくことが窺える。(僕)を、底知れぬ不安、闇にいざなつてゆくのである。「緑いろ」と「黄いろ」が対になっているが、「平和」「安心」の「緑いろ」の世界が、「面倒」「不安」の「黄いろ」にグラデーショナルに入れ替わり、終末へ向かつてゆく。その過程で、「復讐の女神」も浮上し始める。「地獄」に想到する「火」や「火事」を登場させ、その風景を戦慄をもつて刷り込みをして、更に地獄の使者(復讐の女神)エリニウスにスライドしてゆくのである。さらに、「五 赤光」から、「白と黒」の二項対立を書き込み始める。「Black and White」「黒と白」「ブラック・アンド・ホワイト」を混在させながら、さらに「黒」と「白」を交錯させて登場させている。

前例に倣えば、「White 白色」は、「純潔、貞節、立派な人生の報酬としての白衣、冷たい愛、亡霊の色、魔性の女の色」などを表す色ともされ、「Black 黒色」は、「悪魔の衣、冥界、死、復讐の女神エリニウスの身体」などを表す色ともされている。

前述したように、「白」(白い8、白地・白張りの提灯・白じらと各1)は「一三回」、「黒」(黒ませて1、黒子1、黒い犬1、黒犬1)は四回、「黒と白」(黒と白2、Black and White 2、ブラッ

ク・アンド・ホワイト1)は五回である。ここで注意を要するのは、「白」単独の登場が四回に対し、「黒」の単独の登場はゼロということである。さらに言えば、両者がセットでの登場は五回である。「黒」は、セットでの使用に限られているのである。

(14) 僕はこのホテルの外へ出ると、青ぞらの映つた雪解けの道をせつせと姉の家へ歩いて行つた。道に沿うた公園の樹木は皆枝や葉を黒ませてゐた。のみならずどれも一本ごとに丁度僕等人間のやうに前や後ろを具へてゐた。

(15) 「ウイスキーを。Black and Whiteばかりでございませうが、……」

／僕は曹達水の中にウイスキーを入れ、黙つて一口づつ飲みはじめた。――(中略)――「我々は丁度日本画のやうに黒と白の外に色彩のない女の肖像画でも満足である」と云ふ肉筆のP・Sを加へてゐた。僕はかう云ふ一行にBlack and Whiteと云ふウイスキーの名を思ひ出し、ずたずたにこの手紙を破つてしまつた。

(16) (五 赤光) が、その二三町を通るうちに丁度半面だけ黒い犬は四度も僕の側を通つて行つた。僕は横町を曲りながら、ブラック・アンド・ホワイトのウイスキーを思ひ出した。のみならず今のストリントベルグのタイも黒と白だつたのを思ひ出した。それは僕にはどうしても偶然であるとは考へられなかつた。若し偶然でないとするれば、――僕は頭だけ歩いてゐるやうに感じ、ちよつと往来に立ち止まつた。――(中略)――

／僕は妻の実家へ行き、庭先の籐椅子に腰をおろした。庭の隅の金網の中には白いレグホーン種の鶏が何羽も静かに歩いてゐ

た。それから又僕の足もとには黒犬も一匹横になつてゐた。

僕は誰にもわからない疑問を解かうとあせりながら、兎に角外見だけは冷やかに妻の母や弟と世間話をした。

#### 〔六 飛行機〕

ここで気が付くことは、「黒」は、後半「五 赤光」から最終章「六 飛行機」に集中して登場する（「緑いろ」が、前半に集中していることに對をなそう）。それも「五 赤光」で、「白」とセツトで「Black and White」あるいは、「白と黒」して登場する。前述したが、「黒」の単独の登場はゼロである。「白」とのセツトでの登場は五回で、このパターンに限られているのである。白黒のイメージは、葬列に結び付くことも否めないが、〈復讐の女神〉を補助線とすれば、もつと躍動するイメージが読み取れるのである。すなわち、「はじめに」で触れたがエリニユスは「復讐が貫徹すると、真つ黒な服装が純白に変わる」からである。「黒」が登場し、更に「白」のイメージを付与し、白の世界の裂け目に黒の世界が割り込むのである。「黒」が本格的に作品世界に機能し始めるのは、「五」からであることは言を俟たない。そして、「白」と「黒」は入れ替わることなく、「白と黒」にスライドしてゆく。テキストの進行過程で鳥瞰的に見れば、「白」「黒」、「黒と白」「ブラック・アンド・ホワイート」「Black and White」は、〈復讐の女神〉エリニユスに行き着くのが読みとして過剰な無理はない。〈復讐の女神〉エリニユスは、文献を渉猟すれば様々などころに出てくる。いうまでもなくギリシア神話は統一的なものはないが、彼女たちが黒い服装をしていたことは、共通し

ている。

その姿は大体翼をもち（あらゆるところを、海山の障害を超えて、犯罪を追跡してゆくという意味で）、髪には無数の蛇がまきつき、黒い衣を身に纏うて、手には炬火か笞かを携える。そして彼らが追及すべき犯人を見つけると、あくまでも追跡して苦しめ、しばしば狂気のようにならせる、そしてあらゆる種類の苛責を与えるのである。その平生の住居は冥界の暗所エレボスであつて、彼らはしばしば野獸をあくまでも追跡する獵犬に喩えて、「冥界（地獄）の犬ども」と呼ばれた。

（呉 茂一『ギリシア神話』（上））

彼女たちは老婆（グライアイ）であるが、白髪であるのではない。というわけは、髪の毛でなく、蛇が生えているのである。彼女たちの皮膚は黒色で、衣裳は灰色である。彼女たちはマニアイ、すなはち「狂乱の女たち」ともいわれ、オレステスを母親殺しのかどで追跡したときは、はじめは、黒い姿で彼の前にあらわれている。追われたオレステスが狂つて、自分の指を一本咬み切ると、彼女たちは白い姿に変わったのである。

（カール・ケレーニイ『ギリシアの神話』）  
また、ウィキペディアを参考として挙げれば、

エリーニユスは冥府にあるエレボスに住み、頭髮は蛇、頭は犬、身体は炭のように黒く、コウモリの翼を持ち、血走った目をした老女の姿をしている。手には青銅の銚のついた鞭を持ち、これで打たれた者はがき苦しんだ末に死ぬ。復讐が貫徹すると、真つ黒な服装が真つ白に変わるともいわ

れている。エリーニユスたちは恐るべき神であり、本当の名前を出すことははばかられるため、エウメニデス（慈しみの女神たち）と呼ばれる。

と記述されている。二〇ほどの文献を渉猟したが、それぞれによつて扱い方が違うが、「黒い衣を身に纏う」「真っ黒な服装」の表現は、ほぼ共通している。ケレーニイも「皮膚は黒色で、衣裳は灰色」としているが、「黒い姿」としている。さらに、見逃してならないことは、復讐が貫徹すると「彼女たちは白い姿に変わった」「真っ黒な服装が真っ白に変わるともいわれている」のである。「歯車」における、「五 赤光」から、「白と黒」の二項対立を挿入し、「Black and White」「黒と白」「ブラック・アンド・ホワイト」を混在しながら、更に「黒」と「白」をフラッシュ交錯させているのは、〈復讐の女神〉エリニユスたちの、復讐の貫徹を予感させるものであったと考える。

### 三 「翼」の変奏

#### ——「翼」〈エエア・シツプ〉〈飛行機〉——

「歯車」一編を色彩を二つのコードから読んできたが、ここでは、「翼」のイメージの意味するものを検証したい。

「歯車」には、様々な不可解な暗号連鎖、メタファーの連鎖が登場する。その中でも、「翼」から「エエア・シツプ」、「エエア・シツプ」から「飛行機」の暗号連鎖は目立つ。これを解くことは「歯車」を解く太綱の一本である。

「翼」は、周知のようにギリシヤ神話では、〈復讐の女神〉エリ

ニユスの最大の武器となっている。さきに触れたが、呉茂一は「その姿は大体翼をもち（あらゆるところを、海山の障害を超えて、犯罪を追跡してゆくという意味で）」と復讐になくてはならぬものとしている。バーナード・エヴスリンも「三人の地獄の魔女で真鍮の翼と爪を持っていた。彼女らは、神々の怒りを買った者たちに襲いかかりどこまでもつきまとって苦しめ、休む暇を与えなかった<sup>⑬</sup>」としている。その多少の知識がある読者は、早い時点で〈復讐の女神〉エリニユスが選択肢の一つに想起された。

「翼」に関わるものは、全体で二四回登場する。うち、「翼」は一二回（うち「人工の翼」、「翼の音」各2・「翼のある商標」・「翼らしい商標」各1）、「飛行機」は一回（うち「エエア・シツプ」3、雀・鳥3、鳩・鶏2）である。この夥しい数の出現は、何らかのメッセージを託されているはずである。一見、変哲もない偶然的暗号連鎖のようにも見えるが、強かな芥川の、緻密な計算があるう。その計算式を解くことなしに「歯車」一編は読めない。従来、「翼」は、多くは二回登場するイカロスの「人工の翼」に偏り、芸術至上主義の運命とリンクさせ解かれてきた。が、百歩譲つても、復讐の女神の翼とイカロスの翼とはうまく連携しない。〈翼〉をイカロスの人工の翼を基軸とした場合、〈復讐の女神〉の「翼」を、テキスト内でのように結びつけるのか大きな疑問が残る。芸術至上主義の道を歩んできた過去への復讐としての解説の可能性は、脆弱と言えまいか。

「翼」は、「一 レエン・コオト」の末尾で登場させている。ここで、ピシヤリと布石が置かれているのである。

⑰ 僕はいまそのホテルの部屋に前の短篇を書きつづけてゐる。真夜中の廊下には誰も通らない。が、時々戸の外に翼の音の聞えることもある。どこかに鳥でも飼つてあるのかも知れない。

〔一 レエン・コウト〕の末尾

どう考えても、「結婚披露式」が行われるホテルで（初の結婚披露宴は一八九二年、初のホテルウェディングは一九二三年に、それぞれ帝国ホテルで行われている）、「鳥でも飼つてある」は馴染まない。なのに、ほとんど無視されてきたが、なぜ「翼」が、序章「一 レエン・コウト」の締めに登場したのか。（復讐の女神）エリニウスに想到すれば、周到に用意された布石といえないであらうか。さらに、二四回の「翼」に関わるものの登場も物語環境からすれば、特異である。しかし、決して、それは不用意に置かれたものではない。この「翼の音」は、読者はこの時点では不明であるが、次行の「二」のタイトル、「復讐」を呼びこむ。さらに、「三 夜」で再び登場させる。再登場までに「まだ地獄へ堕ちなかつた僕」「聖デヨオザらしい騎士が一人翼のある竜を刺し殺してゐた」を挿み、

⑱ 僕は目を醒ますが早い、思はずベッドを飛び下りてゐた。僕の部屋は不相変電燈の光に明るかつた。が、どこかに翼の音や鼠のきしる音も聞えてゐた。僕は戸をあけて廊下へ出、前の炉の前へ急いで行つた。

〔三 夜〕

と、再登場させている。周到に刷り込みを重ねている。「五 赤光」に到つて、「翼」は、初めて（復讐の女神）エリニウスに結び付く。

⑲ 白い小型の看板は突然僕を不安にした。それは自動車のタイアに翼のある商標を描いたものだつた。僕はこの商標に人工の翼を手よりした古代の希臘人を思ひ出した。――（中略）――同時に又復讐の神に追はれたオレステスを考へない訣にも行かなかつた。――（中略）――赤光！ 僕は何ものかの冷笑を感じ、僕の部屋の外へ避難することにした。廊下には誰も人かげはなかつた。僕は片手に壁を抑へ、やつとロツビイへ歩いて行つた。それから椅子に腰をおろし、兎に角巻煙草に火を移すことにした。巻煙草はなぜかエエア・シツプだつた。（僕はこのホテルへ落ち着いてから、いつもスタアばかり吸ふことにしてゐた。）人工の翼はもう一度僕の目の前へ浮かび出した。僕は向うにゐる給仕を呼び、スタアを二箱貰ふことにした。しかし給仕を信用すれば、スタアだけは生憎品切れだつた。／＼エエア・シツプならばございますが、……

〔五 赤光〕

「自動車のタイアに翼のある商標」は（不安）をもたらし、さらに、「人工の翼」を登場させ、「復讐の神に追はれたオレステス」に暗号連鎖させた。オレステスは、父を情人と計つて殺した母を殺すが、そのため（復讐の女神）エリニウスたちに執拗に追われることになる。後半の「五 赤光」で（復讐の女神）エリニウスは像を持つて登場するのである。そして、新たに角巻煙草の銘柄「エエア・シツプ」へと進展し、「翼」を持った飛行機、更に（復讐の女神）エリニウスの「復讐」ににじり寄つてゆく。「一 レエン・コウト」で登場した「翼の音」は、次第に、結像

を始め最終章「六 飛行機」を迎えるのである。

(20) a やつと僕の家へ帰つた後、僕は妻子や催眠薬の力により、二三日は可也平和に暮らした。僕の二階は松林の上にかすかに海を覗かせてゐた。僕はこの二階の机に向かひ、鳩の声を聞きながら、午前だけ仕事をすることにした。鳥は鳩や鴉の外に雀も縁側へ舞ひこんだりした。それも亦僕には愉快だつた。「喜雀堂に入る。」——僕はペンを持つたまま、その度にこんな言葉を思ひ出した。

既に本論「一」で引用した最終章「六 飛行機」の冒頭に続く段落である。〈僕〉は「松林の中にある僕の家」「僕を中心にした家族の為に借りた家」(③参照)に帰還して、つかの間の〈愉快〉な時間を得ている。そこに〈翼〉をもつ、鳥たちが登場している。「翼の音」ならぬ、「鳩の声」が演出に加わっている。まさに、「喜雀堂に入る」状況である。このテキスト中、最も平和平安を感じる「緑いろ」の世界の時間である。この高揚された時間は断絶され、喪失されてゆく。

(20) b この鉢は又底のまはりに翼らしい模様を浮き上らせてゐた。そこへ松の梢から雀が何羽も舞ひ下つて来た。が、この鉢のあたりへ来ると、どの雀も皆言ひ合はせたやうに一度に空中へ逃げのぼつて行つた。……(中略)——そこへ僕等を驚かしたのは烈しい飛行機の響きだつた。僕は思はず空を見上げ、松の梢に触れないばかりに舞ひ上つた飛行機を発見した。それは翼を黄いろに塗つた、珍らしい単葉の飛行機だつた。鶏や犬はこの響きに驚き、それぞれ八方へ逃げまはつ

た。殊に犬は吠え立てながら、尾を捲いて縁の下へはひつてしまつた。／「あの飛行機は落ちはしないか？」／「大丈夫。……兄さんは飛行機病と云ふ病氣を知つてゐる？」／僕は巻煙草に火をつけながら、「いや」と云ふ代りに頭を振つた。／「ああ云ふ飛行機に乗つてゐる人は高空の空氣ばかり吸つてゐるものだから、だんだんこの地面の上の空氣に堪へられないやうになつてしまふのだつて。……」／妻の母の家を後ろにした後、僕は枝一つ動かさない松林の中を歩きながら、ぢりぢり憂鬱になつて行つた。なぜあの飛行機はほかへ行かずに僕の頭の上を通つたのであらう？ なぜ又あのホテルは巻煙草のエエ・シップばかり売つてゐたのであらう？ 僕はいろいろの疑問に苦しみ、人氣のない道を選つて歩いて行つた。

長い本文引用になつてしまつたが、ここに到つて、今までの暗愚連鎖の確認と意味が展開されているからである。まず、「喜雀堂に入る」をもたらしした要因の一つであつた「雀」もなぜか「翼らしい模様」になにかを感じ、「松の梢」ならぬ「空中へ逃げ」るのである。「松」から「空中」の移動は、「飛行機病」あるいは〈宙吊り〉へとリンクすることも見逃せない。「鳩」や「雀」は「飛行機」に変わり、「翼の音」「鳩の声」は、「飛行機の響き」に変わり登場する。それも、飛行機は、「松の梢に触れないばかりに舞ひ上つた」のである。その飛行機は、なぜか「翼を黄いろに塗」られていた。「緑いろ」の世界は、「黄いろ」「翼」によつて、その領域を侵略されてゆく。予断を許さぬところまで来ているよ

うである。それでも、自分を不安にする、更に終末を予感させる目に見えない〈なにものか〉その正体を問う。〈僕〉は、自分の身に降りかかってくる得体のしれないものの元凶を確認しようとするのである。「なぜあの飛行機はほかへ行かずに僕の頭の上を通つたのであらう?」「なぜ又あのホテルは巻煙草のエエ・シツプばかり売つてゐたのであらう?」と自問する。それは、苦しみを齎すだけであつた。さらに事態は進む。

②③ (c) すると僕の臉脛の裏に銀色の羽根を鱗のやうに畳んだ翼が一つ見えはじめた。それは實際網膜の上にはつきりと映つてゐるものだつた。僕は目をあいて天井を見上げ、勿論何も天井にはそんなものないことを確めた上、もう一度目をつぶることにした。しかしやはり銀色の翼はちゃんと暗い中に映つてゐた。僕はふとこの間乗つた自動車のラティエエタ・キヤツプにも翼のついでゐたことを思ひ出した。……

「臉脛の裏」の「銀色の羽根を鱗のやうに畳んだ翼」は、「一レエン・コウト」の「目の臉の裏には齒車が幾つもまはつてゐた」がフラッシュバックしよう。言うまでもなく、〈復讐の女神〉エリニユスの「真鍮の翼」のイメージに合致する。さらに、①⑨の「自動車のタイヤアに翼のある商標」に共振する。「自動車のラティエエタ・キヤツプにも翼のついでゐた」とだめ押しをしている。ここで、「翼」と〈復讐の女神〉エリニユスは緩やかに結像するのである。「白と黒」が、出現し、〈僕〉には確かとは認識できないが〈復讐の女神〉エリニユスの〈復讐〉が迫っていることを暗示する。

### むすび 「復讐の女神」に行きつく風景

「齒車」は、様々なコードが複雑に張り巡らされている多層的テキストであることは、すでに縷々述べた。

最初の心中未遂日と「六 飛行機」の脱稿日と重なるという意味で「齒車」は、絶筆になりそこなつた「絶筆」であつたことを拙稿①の時点から述べてきたが、〈創作者としての総決算〉であることを思えば当然すぎることであつた。その多層の地平から、本論は、ヘブラニズムとヘレニズム、更にその下層のギリシャ神話とキリスト教、更にその一つギリシャ神話のコードで読んでみた。一体、テキスト冒頭の「結婚披露式」ホテルウェディングに向かう〈僕〉が「誰か僕の眠つてゐるうちにそつと絞め殺してくれるものはないか?」(テキスト末尾)と追い詰められる過程に何があつたのか、何を経験したのか。それを「齒車」本文に寄り添いながら、解読してきた。その過程は、〈復讐の女神〉エリニユスの結像化にあつたことが明らかになつた。

〈復讐の女神〉エリニユスのイメージをもう一度確認すると、「翼をもち(あらゆるところを、海山の障害を超えて、犯罪を追跡してゆくという意味で)、髪には無数の蛇がまきつき、黒い衣を身に纏うて、手には炬火か笞かを携える」「追跡して苦しめ、しばしば狂気のようにならせる、そしてあらゆる種類の苛責を与える」(註11参照)、「はじめは、黒い姿で彼の前にあらわれている。追われたオレステスが狂つて、自分の指を一本咬み切ると、彼女たちは白い姿に変わった」(註12参照)のである。

「緑いろ」から「黄いろ」の世界へのグラデーション的移行は、平和、家庭、の崩壊の予兆を、さらに「赤」によって地獄の業火を見せつけた。唐突な「黒と白」の世界の出現は、「黒」「白」の交互点滅を思わせ、〈復讐の女神〉エリニユスたちの〈復讐〉の貫徹が近いことを示す。さらに言えば、原題「ソドムの夜」から定稿「鹵車」は、それほど離陸していないことも核にしていかなければならないだろう。その視点を導入することで、色彩については合理的に読める。もちろん場外の知識を必要とするが、このテキストの発表の事情を考えれば、ルール違反とは断言できない。自裁の予定で家を出た芥川が未遂に終わりに家に戻り、『大調和』の原稿の責を果たすため、「一 レエン・コウト」だけを切り離して、佐藤春夫の言を容れ「鹵車」と訂し、『大調和』に渡したのである。「二」以下は自裁後、「遺稿」として一〇月『文芸春秋』に発表された。その「鹵車」発表の事情は、原題「ソドムの夜」の相応の距離感を無視できない。その発表状況を補助線にすれば、周到な色のイメージの配置がより明瞭になる。さらに、唐突にも見える〈翼〉のイメージの変奏も、ギリシャ神話の教養の散在を合わせ読めば、〈復讐の女神〉エリニユスの翳が確かと迫り、戦慄の恐怖が迫っていることを知る。開けることのない〈ソドムの夜〉の闇の中に、実像が見えない不安や滅びや終末を感じながら彷徨する〈僕〉を発見する。「五 赤光」での老人との会話は、その前兆でもある。

「悪魔を信じることは出来ませんがね。……」／「ではなぜ神を信じないのです？ 若し影を信じるならば、光も信じず

にはゐられないでせう？」／「しかし光のない暗もあるでせう。」

悪魔／神、闇／光の二項対立は、〈神〉〈光〉が欠けた片翼飛行なのである。「光のない闇」とは、言うまでもなく〈ソドムの夜〉の闇である。

〈僕〉は、透明な無気味な〈復讐〉に戸惑いながら、ついに、かう云ふ気もちの中に生きてゐるのは何とも言はれない苦痛である。誰か僕の眠つてゐるうちにそつと絞め殺してくれるものはないか？

と、もらず。自ら手を下すのではなく「そつと絞め殺してくれるものはないか？」とつぶやき消えるのである。

が、芥川は半開きのまま、いわば宙吊りのままテキストを閉じる。始末を与え物語を閉じれば、物語世界は収束する。収束しなければ、読者はテキストから離れない。〈半開き〉（「蜃気楼」）、宙吊り、曖昧性にすることによって、作品は常に読者の内に巣作りをする。そして、読者は自らの新たな物語に拘らなければならない。その意味で行き詰った〈近代〉を超克する文学の課題が孕む。モダニズム文学の先蹤としての「鹵車」がある。

芥川文学が、日本近代文学において、多彩性、多層性においては、群を抜いている一人であることは言を俟たない。さらに、三五歳で人生の行程を閉め、さらに、作家生活も一〇数年に満たない。そのことを思えば、際立ち方も、その意味でも群を抜いている。それをかつては、ベダンティズム、知的作家、大正期の鬼才などと呼称され、ある時は「青年時代の愛読の作家」「大人への

通過儀礼の作家」「拵えものの名手」など多少ネガティブの印象を持って語られた。それほどに、芥川の東西の文学的教養、文化的歴史的教養が広範にわたり、あたかも、「広くて浅いのではないか」という疑義を持たれたからかもしれない。時代性の中にあつて、読者の読書教養が追いつけなかったともいえる。人間理解がグローバルになった二一世紀前後から、芥川文学の理解が変わり、モダンズム文学のコアを支える課題の萌芽を掘り当て、再評価が世界的な規模で始まっている。「菌車」一編は、その芥川龍之介の文学の〈極北〉であることを否定できない。

なお、本論は、日本キリスト教文学会ミニシンポ「芥川龍之介『菌車』を〈読む〉」（於上智大学、二〇一二年二月八日）での「飛行機は、なぜ、〈僕〉の頭上を飛んだのか——〈翼〉のイメーヂをめぐる——」、および、学習院大学人文科学研究所主催特別講演会「芥川龍之介『菌車』の世界——「翼」「エアー・シップ」「飛行機」、あるいは色彩語で読み解く——」（二〇一九年五月二三日）、の内容の一部に新たに加筆執筆したものである。

## 註

- (1) 「舞踏会」「枯野抄」「春服」「黄雀風」「きりしとほろ上人伝」「アグニの神」「本所両国」「將軍」「越し人」「酒虫」「往生絵巻」「或阿呆の一生」「野呂松人形」「カルメン」。他の記述回答に、「晩年のもの」「晩年の作以外はみな好きです」「詩が一番好きです」「初期の作品はみな好きです」「中期の作品が

好きです」「どれが一番とかちよつといえない」「一口には言えない」などがある。

- (2) 村上春樹「芥川龍之介——ある知的エリートの滅び」(PEN-GUIN CLASSICS シリーズの Rashomon and Seventeen Other Stories (英国版) の英文〈序文〉(二〇〇六・三))、シェイ・ルービン編 村上春樹序「芥川龍之介短編集」(二〇〇七・六)として、新潮社から刊行)。なお、村上文学は、芥川文学とは水脈でつながると考えている。「芥川龍之介と村上春樹——村上春樹〈芥川論〉『知的エリートの滅び』Downfall of the Chosen を起点に・現代性へのリンク」(二〇一二年、関口安義編『生誕二二〇年 芥川龍之介、翰林書房)、「村上春樹と芥川龍之介——〈闇〉〈沈黙〉の「魅惑」、近代文学における一つの水脈——」(村上春樹叢書『村上春樹における魅惑』二〇一八・六・七、淡江大学出版センター) 参照。

- (3) ①芥川作品論辞典「菌車」(別冊国文学『芥川龍之介必携』、一九七九・二)、②「芥川龍之介の罪意識」——「白」「菌車」を中心として——(一九七九・四、日本キリスト教文学会編『罪と変容』所収、笠間書院)、③「菌車」——〈ソドムの夜〉の彷徨——(一九八一・五、『国文学』、学燈社)、④「作品別芥川龍之介研究史「菌車」(一九八五・五、『国文学』、学燈社)、⑤「芥川龍之介小論——〈狂人の娘〉(「菌車」「或阿呆の一生」)(復讐の神)(「菌車」)と父の〈性〉への忌避をめぐって——(一九八五・一二、『玉藻』、フェリス女学院大学

国文学会)、④「芥川龍之介『蘭車』ノート―嵌めこまれたさまざまな風景―」(一九九七・八、『キリスト教文芸』、日本キリスト教文学会関西支部)、⑤「芥川龍之介『蘭車』―ドストエフスキー「罪と罰」との関わりをめぐって―」(二〇〇九・三、『湘南文学』、東海大学日本文学会)

- (4) 「芥川龍之介の罪意識―「白」をめぐって―」一九七五・一二・二五、『キリスト教と文学』研究会(現日本キリスト教文学会)九州支部。活字化が一九七九年になった(①参照)。お互いに別別に発想したものであるが、吉村・中谷『芥川文芸の世界』(一九七七・八、明治書院)に中谷克己氏の指摘がある。

- (5) 三枝和子『ギリシア神話の悪女たち』(二〇〇一・一、集英社)

- (6) 蓮実重彦「接統詞的世界の破綻―芥川龍之介『蘭車』を読む―」(一九八五・五、『国文学』、学燈社)

- (7) 筑摩書房刊「現代日本文学体系」・「月報」(一九六八・八) Ad・de・Vries “Dictionary of Symbols Imagery” 1974 (下圭一郎ほか訳アド・ド・フリース『イメージシンボル辞典』1984 大修館書店刊)。違うイメージを広く表すこともあるので、恣意的引用の危険性もあるが、大いに参考になる。

- (9) 註3の①など参照。また、石崎等は、「松林のある風景―『蘭車』1面」(一九七二・五、『現代国語研究シリーズ1 芥川龍之介』で、「もともと日本的な『家』霊というべきもの」としている。

(10)

註3の①②などによって、残された原稿のタイトルの修正を検討し、「蘭車」の原題が「ソドムの夜」であったこと、さらに、「東京の夜」、「夜」と改題され死後遺稿「蘭車」として発表されたことを明らかにした。

(11)

呉 茂一『ギリシア神話』(上)(下)(一九七九・一〇、一新潮社)

(12)

植田兼義訳カール・ケレーニイ『ギリシアの神話―神々の時代』(一九八五・四、中央公論社)

なお、註の5・11・12のほかになんか主文を挙げると、

野上弥生子訳トマス・ブルフィンチ『伝説の時代』(一九一三、尚文堂。日本で最初のギリシア・ローマ神話集、序文は夏目漱石。一九五三年に完訳し上下巻に改版。一九七八年に改題し岩波文庫全一巻に改版)

野上弥生子訳トマス・ブルフィンチ『ギリシア・ローマ神話』(一九五三、岩波書店、一九七八改版)

山室静『ギリシア神話』(一九六二・七、社会思想社)

高津春繁訳アポロドーロス『ギリシア神話』(一九五三・四、岩波書店)

大久保博訳トマス・ブルフィンチ『ギリシア・ローマ神話』(上下)(一九七〇・一二初版、二〇〇四・五改訂版、角川書店)

植田兼義訳カール・ケレーニイ『ギリシアの神話―英雄の時代』(一九八五・四、中央公論社)

中島健訳フレリックス・ギラン『ギリシア神話』(一九九

一・八、青土社）などがある。

(13)

B・Bernard Evslin “Gods Demigods & Demans An Encyclopedia of Greek Mythology” 1975 小林稔訳『ギリシア神話小事典』（一九七九・九、社会思想社）

(14)

註3の①②など参照。

（みやさか・さとる フェリス女学院大学名誉教授）